



# 芝小だより

## 第十月号

じんかん

「人間」距離の意味するところ

―先輩教員から学んだことを通して―

校長 齋藤 幸之介

依然としてコロナ禍では「新しい生活様式」を求められ、当然のごとく「ソーシャルディスタンス」にも気を付けるように促されています。一方で、学校の存在意義の一つである「人が集う」価値を子供たちは求めており、今では隣の友達と付けていた机を離してはいますが、学習時には時に友達の発言を注意深く聞き、また休み時間には互いに関わりながら楽しそうに過ごしています。子供たちも自分たちなりの距離の取り方を身に付けてようとしています。

今回は、この「距離」について考えてみたいと思います。

### 「身体拡張」

今から二十年ほど前、ある大学の体育科教育専門の教官から「身体性拡張」を習いました。当時あまり使われていない用語でしたが、とても興味深い意味が込められていることに気付きました。

人間は、自分の体が直接届く物などを手に取ってコントロールすることができます。自分の目の前にあるテレビのリモコンを取ってチャンネルを変える、グラスを持ってお茶を飲む、という行為です。しかし、離れたところにある物を操作することはできません。こういった状況のとき、物に「間接的」に働きかけることを「身体的拡張」と言います。例を挙

発行所  
港区立芝小学校  
〒105-0014  
港区芝2-21-3  
[TEL:03-3456-3072](tel:03-3456-3072)  
[FAX:03-3456-3072](tel:03-3456-3072)

げて具体的に説明をします。

(一) ゴルフボールはクラブでボールを叩いて飛ばします。

プレイヤーは、手で「直接」打つのではなく、クラブという道具でボールに「間接的」に働きかけています。

(二) サッカーで味方にボールを渡す場合、ドリブルをして運んで「直接」渡すこともできますが、ボールを蹴って渡すことがあります。蹴った瞬間にボールは人間から離れますが、この状況を「間接的」と捉えます。

クラブの扱いがうまくなったりパスの仕方が上達したりすると、スポーツの技能は向上し、楽しさを味わえます。つまり、身体的拡張という一つの能力を身に付けることが重要である、となるわけです。

この考え方は、平素の場面でも応用できます。例えば、子供たちを電車に乗せるとき、背負ったリュックを「前に抱えなさい」と指導することがあります。これは、背後は見えないわけですから、自分がコントロールできるように、という意味でこう伝えます。そして、いすれ、荷物を背負ったり引いたりしたときに、「人にぶつからないかな」と、周囲との距離を自ら推し量ることができれば、とも思います。

### 「人間距離」

人と人との距離、あるいは距離感を「じんかんきより」とおっしゃり、その意味を私共に説いてくださった方がいらっしゃいます。昨年度まで本校教員の研修の講師として御指導くださった、港区立芝浦小学校元校長 江守利公先生です。

江守先生は、「人と人との距離が怪しくなってきた」「ことを現代の教育課題として掲げていらっしゃる」と



先生は教育雑誌の中で、出会った子供が挨拶に困っていると挨拶のやり方を促しながらきちんとさせている保護者を肯定的に捉えたり、ベビーカーを車内に入れた後に周囲にお構いなく高い声で話す母親を憂いたりされていました。江守先生は私共に、人と人との距離はいかにとるべきか、そして、今後このことをどのように教育現場で扱っていくべきか、を問うてくださった、と捉えています。

かつて欧州でも大活躍したサッカーの中田英寿選手は、「キラーパス」という言葉をやらせた一人でした。パスをしたい味方を妨害しようとする敵のさらに後ろにパスを出すその素晴らしさに、多くの人々は感動をしました。そこには、周囲の状況を瞬時に読み取る判断力、味方の選手の走力を始めとする能力への深い理解力などを総動員して一つのプレーを成立させています。身体性拡張は、中田選手のように様々な能力を活用させてこそ成り立つのです。

江守先生が提起された課題を解決すべく、私共は、身体性拡張の意味を一つの手掛かりとし、周囲の状況を多角的に判断し、近すぎていけない、離れすぎては何も感じられない、そんな距離を自分でつくりながら、心地よい人間関係を築き上げられる子供たちを育てたいと考えています。このことは、冒頭に申し上げたソーシャルディスタンスをも包み込む、広くて深い価値をもっているのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

(参考) 所報第七九号(平成一七年)、同第八一号(平成一八年)

いずれも麻布台学校教育研究所